

令和元年6月17日現在

機関番号：34533

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K15916

研究課題名（和文）一般市民を対象とした乳がん検診率向上と受療行動を促すアプローチ方法の開発と促進

研究課題名（英文）Development and promotion of an approach to promote breast cancer screening rates and treatment behaviors for the general public

研究代表者

田中 登美（TAMAKA, Tomi）

兵庫医療大学・看護学部・准教授

研究者番号：80316025

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20歳～40歳までの日本人一般女性10名を対象に個別インタビューを行った。対象者の年齢は24～36（平均年齢32.3）歳、夫と子どもと同居/両親と同居が各4名、6名が就労していたが、4名が育児休職していた。6名は乳がん検診を一度も受けたことがなかったが、毎年受けている方は1名いた。

乳がんに関する認識は、女性に多いが年齢的に他人ごと、早く発見すると治るが自覚症状に気が付いた時には進行しており命にかかわる病気であった。検診時の痛み、費用、情報不足が受診行動を阻害していたが、身近な人のがん体験や一度検診を受けたことで得た安心感により必要性を認識して定期的な自己検診の継続に繋がっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の特徴である就労・母親世代である20～30歳代の一般女性を対象にしたインタビューにより、乳がんとその検診に関する認識や受診行動に影響する要因を明らかにした研究成果は意義がある。検診の利点を認識して定期的に受診行動がとれていた場合でも妊娠、出産、授乳などのライフイベントで中断したり、費用や情報不足が受診行動を阻害していることも明らかになった。検診により安心感が得られること、がん体験者との交流から自らネットで調べて検診の必要性を認識するという意見もあり、社会全体で乳がん検診の啓発をすることの意義が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we interviewed 10 Japanese women aged 20 to 40 years old. The subjects were 24 to 36 years old (mean age 32.3), and their husbands and children and their parents / living parents were 4 and 6 working respectively, but 4 were on childcare leave. There were six people who had never received a breast cancer screening, but there was one who received it every year.

Recognition of breast cancer is more common among women, but it is an age-related stranger, and it is cured when it is detected as soon as possible, but it is a life-threatening disease that progresses when symptoms are noticed. Pain at the time of medical checkup, expense, lack of information inhibited the examination behavior, but we recognize the need by the sense of security obtained by the cancer experience of familiar people and once received medical checkup and regular self-examination

研究分野：看護学

キーワード：乳がん検診 受療行動

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1981 年以来、がんは死亡原因の第 1 位で、2013 年には 364,872 名と増加し続けている。我が国のがん政策は、1964 年「対がん 10 年総合戦略」に始まり、がん病態の解明、早期発見・早期治療に取り組んできた。2006 年には「がん対策推進基本計画」が立案され、「がん登録」を義務化したことにより、現在、毎年約 98 万人が「がん」と診断されており、3 人に 1 人が「がん」で亡くなることを報告するに至っている。

日本人女性では、乳がん罹患率が最も高く、30 歳代から増加し、40 歳代後半から 50 歳代前半にピークを迎え、その後は次第に減少する。日本人の乳がん罹患率は、欧米より若干若いという特徴があり、若いときから自分の乳房に関心をもつことが大切であると考えられる。乳がんの 10 年相対生存率は 79.3% で、早期乳がんでは、適切な治療を受けることで、治癒することが可能であり、費用助成などを行っているが、乳がんの検診受診率は 36.4% で、欧米が 70 ~ 80% に対し、極めて低い実情がある。

がん検診に関する研究を概観してみると、その殆どががん検診率および要精密検査対象者の受診率などの実態報告である。看護研究では子宮頸がん検診に関するものが多く、子宮頸がん検診の受診に関するプロセス・受診を阻害する因子、受診行動に関する個別介入研究がある。乳がん検診に関するものでは、看護職女性を対象にした乳がん検診に対する認識と行動、子育て期の女性・乳がん体験者を対象とした乳がん検診の受診を促進する要点がある。しかし就労者を対象とした看護研究は、胃がん検診に関する認識・行動や影響要因のみである。つまり、日本の乳がん患者は就労・母親世代である 30 歳代から増加するにもかかわらず、就労・母親世代の一般女性を対象にした看護研究、乳がん検診に関する認識や受診行動に影響する要因をテーマにした看護研究は見当たらない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、乳がん罹患好発年齢である就労世代、母親世代の一般女性を対象にした乳がんとその検診に関する認識、受診行動に影響する要因を明らかにすることである。さらに得られた結果から、一般市民を対象とした乳がん検診啓発のためのアプローチに関する示唆を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

因子探索型の質的記述的研究。

(2) 研究対象者

就労・母親世代である 20 歳 ~ 40 歳までの日本人一般女性。

(3) データ収集の方法

半構造化インタビュー

就労・母親世代の一般女性の乳がんとその検診に関する認識、受診行動に影響する要因について明らかにするために作成したインタビューガイドを用いて、プライバシーの確保された個室で行った。インタビューは、研究対象者の日常生活や就労、生活上の予定に支障のない時間帯に行い、身体的疲労や集中力の持続を考慮して、インタビューは 45 分以内とした。また、インタビュー中に研究対象者に負担がないかを確認すること、負担がある場合はすぐにインタビューを中止することとしていたが、そのようなことは起こらなかった。インタビュー内容の録音は、全研究対象者の了承を得ることができ、IC レコーダーに録音した。得ら

れたデータは、逐語録とし、不明確な部分は、研究対象者にその意味内容を確認した。

記録・聞き取り調査

研究対象者の同意が得られた後に、研究者が作成した研究対象者背景調査用紙を用いて、研究対象者から、研究対象者の背景について情報収集を行う。調査項目は、年齢、乳がん検診を受けた回数や時期とその結果、家族背景、就労状況などとした。

(4) データ分析の方法

インタビューで得られたデータを逐語録とし、「乳がんに関する知識・認識」「乳がん検診に関する認識」「受診行動に影響する要因」について語られている部分を抽出し、各々意味内容が損なわれないように簡潔な一文にしてコードとした。コードを比較検討し意味内容が類似したものを集めてサブカテゴリーとし、名前をつけた。さらにサブカテゴリーを比較検討し、意味内容が類似したものを集めてカテゴリーとし、名前をつけた。

4. 研究成果

(1) 対象者の概要

対象者は、10名で、年齢は24～36歳（平均年齢32.3歳）であった。家族背景は、夫と子どもと同居しているものが4名、両親と同居しているものが4名、独居が2名であった。6名が就労していたが、4名が育児に専念するため休職していた。乳がん検診については、一度も受けたことのないものが6名と最も多く、次いで定期的ではないが今まで数回受けたものが2名、受けたことはあるが最近2年以上受けていないものが1名、毎年受けているものが1名であった。

(2) 「乳がんに関する知識・認識」「乳がん検診に関する認識」「受診行動に影響する要因」

「乳がんに関する知識・認識」は、女性に多い 男女とも罹患する 早く発見されるとがんは治る 乳房を失う手術が必要 自覚症状に気付いたときには進行している 突然、病状が悪化してなくなることもある 命に係わる病気 若い人が罹患すると進行が速い 年齢的にまだ罹患しない 身近ではない 他人ごと に分類された。

「乳がん検診に関する認識」は、身近な人が検診でがんがわかり、必要と感じた 一度受けて安心感が得られたことで定期的に検診を受ける考えが固まった 自己検診方法も教えてもらって実施している という受診行動につながるような認識が分類された。しかし、(マンモグラフィは痛みが強い) 検診に関する情報の入手手段がわからない 検診費用が負担 というような乳がん検診に関するマイナスイメージや具体的な方法がわからないというような内容も分類された。また、乳がん検診を受けていたにも関わらず、妊娠、出産、授乳などで検診の機会が奪われる せめて自己検診と思うが、手技が難しい 自己検診の方法がわからないということが理由で受診行動が中断されているような内容が分類された。

「受診行動に影響する要因」は、妊娠、出産、授乳などのライフイベント 育児に追われて時間が取れない 検診年齢に達していない 検診費用が負担 自分に適した情報が乏しく調べるのに時間がかかる 検診を受けることができる場所や時間帯の情報がない 一度検診を受けたが、自分のような年代の人は受けていない という受診行動を阻害する要因が分類された。また、安心感が得られる 検診を受けた友人の話を聞くと必要性を認識する 親や先輩からの体験から必要性を認識する 女子会で話題になり興味を持つ 同じ年代の人の体験を聞くと検診が必要なのだと実感する 身近な人ががんに罹患した際にネットで調べたことが

ら検診の必要性を認識する 会社の検診などで義務化していれば受ける 30歳代未満にも公的補助があれば受ける などの受診行動を促進する要因に分類された。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕なし

〔学会発表〕なし

〔図書〕なし

〔産業財産権〕なし

〔その他〕なし

6．研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：松本 麻里

ローマ字氏名：(**MATSUMOTO** , **Mari**)

所属研究機関名：兵庫医療大学

部局名：看護学部

職名：准教授

研究者番号 (8桁) : **30295109**

研究分担者氏名：神崎 初美

ローマ字氏名：(**KANZAKI** , **Hatsumi**)

所属研究機関名：兵庫医療大学

部局名：看護学部

職名：教授

研究者番号 (8桁) : **80295774**

研究分担者氏名：森島 千都子

ローマ字氏名：(**MORISHIMA** , **Chizuko**)

所属研究機関名：同志社女子大学

部局名：看護学部

職名：助手

研究者番号 (8桁) : **80735879**

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。